

# 新出の東北大学図書館本

## 『承安五節絵巻』 模本について

山本陽子\*

### 序 『承安五節絵』 模本について

『承安五節絵』は、平安末期の承安元年<sup>(1)</sup>に行われた宮廷の五節行事の様を描いた絵巻であるが、原本はすでに無く、模本のみが数多く残されている<sup>(2)</sup>。

この絵巻は様々な視点から注目されてきた。室町末期には王朝趣味の調度として屏風に仕立てられ<sup>(3)</sup>、江戸初期には住吉如慶によって模写されて住吉派などの大和絵の資料となり、寛政初年の内裏再建に際しては、平安朝の御所の構造を知る資料として用いられた<sup>(4)</sup>(註2—⑦参照)。近代になって後白河上皇の絵巻製作の一端として挙げられ<sup>(5)</sup>、さらに似絵の最初期の事例ともなるのである<sup>(6)</sup>(図版1)。

似絵は平安末期の貴族たちの肖像画観の転換点に位置する。平安朝の貴人の肖像画の忌避とその理由は、現在も肖像画論争の論点の一つで

新出の東北大学図書館本『承安五節絵巻』 模本について

山本陽子 \* 一般教育 助教授 美学美術史(日本・東洋)



1 似絵として描かれた人物群 (東北大学図書館本『承安五節絵』 模本第一段)

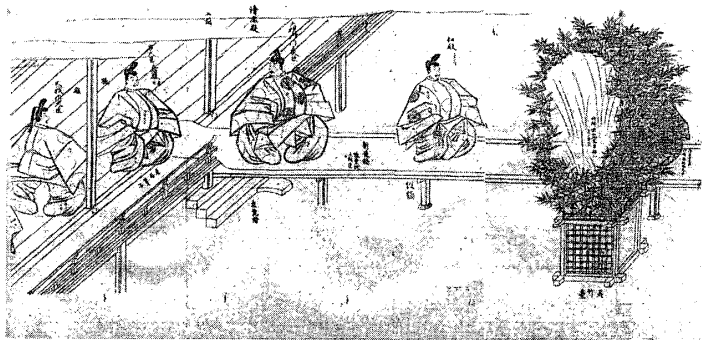
(7) あるが、それほど貴人たちが忌んだ肖像画が、鎌倉時代にはむしろ積極的に描かれるようになる変わり目に、似絵の流行がある。

似絵についての記事の初出は、『玉葉』の承安三年（一一七三）九月九日条の、

御堂御所の障子の絵、その数あり。法文と云ひ本文と云ふ。すでにもつて数ヶの間。そのほか女院御所には、仁安后位のときの平野の行啓、ならびに去年院号ののちの日吉の御幸などを図せらる。おのおの供奉の大臣以下、あはせてその面貌を図せらる。馬権頭隆信その道に堪なるに依りてこれを図す。これ人面ばかりなり。絵師は光長云々。また院御所の高野詣云々。これも同じく人形の像を写さるるなり。珍重極まり無し云々。（後略）  
（傍線 山本）

であるが、この障子絵は伝来しない。『承安五節絵』がこの行事後すぐの承安元年か二年に描かれたとすれば、『玉葉』の記事よりも溯る資料となり、また模本とはいえ絵画からは文章にはない情報を引き出すことができるはずである。すでに本図の似絵性として、大部分の人物に官名と名前、年齢が記され、「人物の相貌に一種の個性」があること、人物が重なり合わず、後ろ向きの人物も顔が見えるように振り向いていることが指摘されている（2―②参照）。さらに、この絵巻には似絵で顔を表された貴族と、意図的に竹の陰に姿が隠された天皇とが、併せて描かれていることも知られている（図版2）（註5―①参照）。

それにもかかわらず、肖像画論争に『承安五節絵』が用いらることは、ほとんどない。単に模本であるからという理由のみにしては、同じく似絵の模本とされる『中殿御会図』の方はしばしば引き合いに出されるのである。恐らく問題点は、大半の『承安五節絵』の模本では、顔貌描写がほとんど省略されてしまっていることにある（図版3）。これらの



2 竹の陰に姿の隠された天皇と似絵の貴族たち（東北大学図書館本『承安五節絵』模本第三段）



3 高橋宗直系は顔貌表現に意を払わない（東京国立博物館（乙）本『承安五節絵』模本第一段）

五節絵』の似絵性は情況証拠の域を出なかった。

### 一 住吉内記系統の模本

実際、二十余の模本のほとんどを占める高橋宗直系模本は、寛政の内裏造営の参考として、建築を写すことに重点が置かれ、個々の顔貌には全く関心が払われていない（註2―⑦参照）。しかし巻末に住吉内記の署名を持つ系統の作品群に限っては、顔貌の個性を描き分けた形跡が残っている。

そこで前論文<sup>(9)</sup>では、この住吉内記系の、東京国立博物館蔵(甲)本・東海大学附属図書館桃園文庫蔵本・京都大学附属図書館蔵本・早稲田大学図書館蔵(乙)本・小堀旧蔵本<sup>(10)</sup>の五本によって、『承安五節絵』の似絵性を検討した。これらは内記の署名がなく、文化四年(一一八七)の年記と狩野養信の花押のみの東博本と、署名部分が「右屏風一双分也他見無用/禁裏御道具/五節淵醉之御屏風/右京大夫信實朝臣筆/右繪本者如慶法眼寫也/住吉内記」の桃園本と京大本、「右屏風一双分也他見無用/住吉内記」の二行のみの早大本と小堀本、の三系統に小分することができる。

いずれも透明度の高い紙に透き写して模写したものであり、個々の人物の顔の輪郭、眉や鼻立ちの表現に差異を見出すことができる。なかでも明確な形として伝わりやすい顔幅の広狭や髭の有無を五模本の同一人物間で比較すると、一致する率は非常に高く、これらの特徴が少なくとも住吉如慶の最初の模写に溯るものであると考えられる。

さらに同一人物の顔貌表現を比較することによって、原図の人物が似絵として描かれたか否かを検証した。『承安五節絵』に繰り返し登場し、複数回氏名が記されている二〇名の顔の幅、および眉の形と髭の有無を比較すると、同一氏名の人物の顔の特徴は、どの登場場面でもほぼ共通し、特に顔の形ではすべてが一致した。

また、個々の人物の顔の特徴が実際の本人の顔立ちに基づくものか否かを検討するため、『承安五節絵』の人物のうち、似絵として知られる『公家列影図』と『天子撰関大臣影』にも肖像が載る十一名の顔貌表現を、これらと比較した。おおむね三者の顔立ちの特徴は共通し、特に骨格が一致するので、『承安五節絵』が本人の顔の特徴に基づいていることになる。こうして、住吉内記系の五模本の顔貌表現による直接の検証

結果からも、『承安五節絵』の原本が最初期の似絵として描かれたことが確認できた。

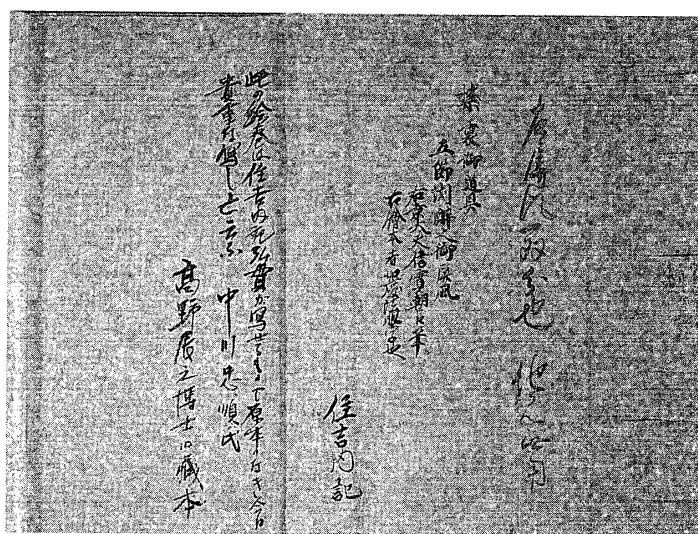
ただしこれらの五模本の顔貌描写は、単独で資料として使うにはそれぞれ問題がある。東京国立博物館蔵(甲)本は、描写が最も丁寧で、模写の年も描き手も明らかな基準作品であるが、似絵の最重点ともいえるべき顔の輪郭が、しばしば目の窪みを作らない簡略化されたものになっているという欠陥がある。平安時代の絵巻の人物は、似絵のみならず説話画の庶民も、物語絵の引目鉤鼻の貴族ですら、顔の輪郭は目のところであったん切れた二筆無いし三筆で描かれているので、これは当初からの表現とは考えられない。後の土佐派や住吉派の源氏絵では貴人の輪郭が一筆で卵形に描かれているので、度重なる模写の何れかの段階で、細やかな輪郭描写が失われたと考えられる。

桃園本と京大本の描写はやや簡略で、特に眉は太く描いた造り眉と、細長い自然の眉との区別が行われなればかりか、時々眉の写し忘れがある。

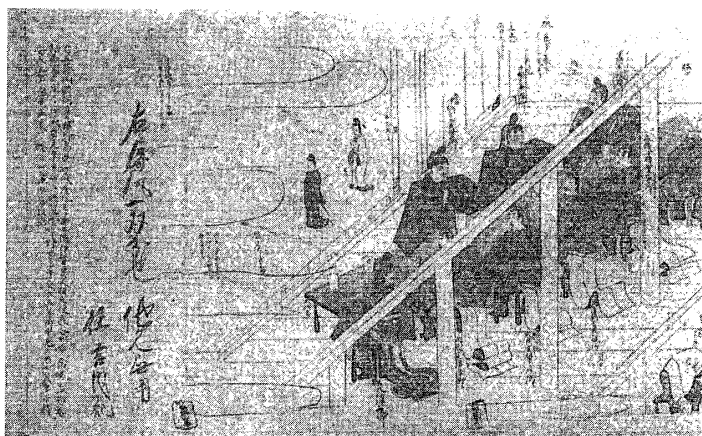
早大本には省略はなく描き込みも多いが、顔貌を描写する墨線がやや太細のある勢いの強い筆使いのため、良くいえば戯画的、悪くいえば粗雑で粗い印象がある。初期の『隨身庭騎絵巻』の極細の輪郭線などから比較すると、これが当初からの筆致であるかは疑わしい。小堀本の描写はかなり丁寧に思われるが、現所在は判らず、その様相は小さい図版写真によってうかがうしかない。

## 二 東北大学図書館本『承安五節絵』

この住吉内記系統の五模本による前論文の発行直後に、東北大学図書



4 東北大学図書館本『承安五節絵』模本 奥書・奥付



5 早稲田大学図書館(乙)本『承安五節絵』模本 奥書・奥付



6 京都大学図書館本『承安五節絵』模本 奥書

館本『承安五節絵』(卷子本)の存在を知った。東北大学図書館所蔵の『承安五節絵』としては、『国書総目録』に『五節舞姫』として掲載されている、斎藤彦磨模写の冊子本が古くから知られ、狩野文庫蔵本として東北大学図書館のホームページ上で一部図版が公開され、川島絹江によって紹介もされている(註2―⑩参照)。しかし本論文で取上げる『承安五節絵』は、これとは全く別の卷子本であり、これまで紹介されたことを聞かない。

新出の東北大学図書館所蔵の『承安五節絵』(卷子本)は、平成十四年五月の第五十五回美術史学会全国大会協賛企画「東北大学附属図書館

所蔵稀観美術資料展」のⅡ古書画模本に展示されたものである(追記参照)。東北大学大学院文学研究科東洋・日本美術史研究室と美学・西洋美術史研究室編集・発行の同展目録には、

承安五節絵 一卷

住吉弘貫(一七九三―一八六三)写

紙本白描 縦三十七・四センチメートル 江戸時代(十九世紀)

承安元年(一一七一)の五節の模様を描きとどめた記録画。詞・絵各九段。平安時代の原本はなく、室町時代末期、屏風絵に移写したのを絵巻に伝写した未完の模本がいくつか伝存する。本図巻もそ

の一つ。本図巻の人物の面貌描写は諸本より丁寧で優れる。奥書には、住吉如慶（一五九九—一六七〇）の写本を、住吉弘貫（一七九三—一八六三）が写したとある。奥付に中川忠順氏の極書きがある。と記されている。同展では部分展示であったので、あらためて七月に全巻の閲覧と写真撮影の機会を得た。以下はその紹介と考察である。

この東北大学図書館蔵本は、一般古典資料区分の卷子二九九番、漆塗りの二重箱に収められ、蓋に「五節淵醉圖 壹卷」とある。表の紙は内曇りで、じかに『五節淵醉圖 原本信実朝／臣筆／加度之写』と書かれている。所蔵印として見返しには「東北大学図書館之印」が、本紙にかけて「斑山文庫」「陽春廬記」の印が押されている。「斑山」は後出の高野辰之の号、「陽春廬」は明治二十年に七十四で没した国史研究者の小中村清矩のものと思われる。

奥書（図版4）は、

右屏風一雙分也 他見無用

禁裏御道具

五節淵醉之御屏風

右京大夫信實朝臣筆

右繪本者如慶法眼寫也

住吉内記

とある。奥書の文面は先の京大本・桃園本と同じ（図版6参照）ながら、一行目と二行目以下との差異が大きい。一行目の「右屏風一雙分也 他見無用」が、早大本とも共通する住吉如慶とおぼしき右上がりの細長い筆跡を模して、薄目の墨で写されているのに対し、二行目以下は墨色も筆跡も異なり、濃墨の角ばった筆致である。末尾の署名も、濃墨の角張ったもので、文面は同じ「住吉内記」ではあっても、早大本で「右屏風

一雙分也 他見無用」に続いて書かれていた署名の、如慶らしき細長い右上がりの筆跡（図版5）とは異なる。

住吉派の当主は代々内記の職名を名乗っているもので、東北大本の角張った署名は、如慶ではなく後代の「内記」のものということになる。一行目とそれ以降との差が字体、墨色まで著しいことから、二行目以下は如慶の一行目の模写に付加された後代の内記による奥書と考えられる。

京大本（図版6）・桃園本は、この六行分が内容から字配り、字体まで東北大本と共通する。この三本で見ると、東北大が一行目と二行目以降の差が際立つので、後二者の系統の原本にあたる可能性が高い。

この奥書に続く別紙の奥付には、別筆で

此の絵巻は住吉内記弘貫が寫せるもので原本のなき今日

貴重な寫しと云ふ 中川忠順氏

高野辰之博士旧蔵本

とある。中川忠順（一七八三—一九二八）は明治から昭和にかけての美術史家である。高野辰之（一七八六—一九四七）は歌謡演劇史家で、斑山と号すので巻頭の蔵書印の「斑山文庫」と符合する。

ただし、なぜ中川忠順が末尾の署名の「住吉内記」を七代の弘貫と判断したのか、その根拠はわからない。確かに弘貫は『扶桑畫人傳』に「土佐の古風を慕ひ殊に活動あり、近代の妙手として時人に賞せられた」と言われるように、江戸末期の土佐派の中でもよく知られた存在であるが、如慶以来住吉家は代々、内記の職名を持っているからである。殊に五代廣行は寛政の内裏再建に参加して賢聖障子を描き、また『寺社宝物展覧目録』の製作にも参加しているので、『承安五節絵』を模写する動機がある。本絵巻が弘貫以外の「住吉内記」の作で、作成年代が十八世紀に溯る可能性も指摘しておきたい。

《表》東北大本・早大乙本・桃園本・京大図本・東博甲本の相違（網掛は東北大本との相違点）

Table with columns for book numbers (e.g., 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85) and rows for various titles and editions. The table contains a grid of characters (有, 無, 細, 中, 大, 極) and numerical values (e.g., 二重, 三重, 四重) indicating differences between editions.

明星大学研究紀要【日本文化学部・言語文化学科】第十一号 二〇〇三年

料紙について付記すれば、先の住吉内記系統の五模本には、いずれも美濃紙のような透明度の高い薄紙が使われていた。原本を丁寧に通写したものであれば、模写した者が『承安五節絵』の貴族たちの顔を実際に



11 東北大学図書館本『承安五節絵』模本第一段 實宗



8 東北大学図書館本『承安五節絵』模本第三段 師長



7 東北大学図書館本『承安五節絵』模本第一段 通親



12 東京国立博物館（甲）本『承安五節絵』模本第一段 實宗



9 東京国立博物館（甲）本『承安五節絵』模本第三段 師長



10 東京国立博物館（甲）本『承安五節絵』模本第一段 通親



13 京都大学図書館本『承安五節絵』模本第一段 通親



14 早稲田大学図書館（乙）本『承安五節絵』模本第一段 通親



17 早稲田大学図書館（乙）本『承安五節絵』模本第三段 師長

知らなくとも、度重なる模写であっても、仮に顔貌描写に関心が無かったとしても、当初の個々の人物の顔立ちの傾向や、大まかな特徴が残存している可能性は高い。この東北大本も、同様の薄紙を張り継いだ《紙継は附表2参照》もので、臨模ではなく透き写しによる模写であったことが窺われる。試みに、ほぼ同縮尺に焼き付けられた京大本と東北大本の一部分を重ねて透かすと、意図的とは思われないような箇所霞の曲線や、画中の描き込みの位置まで重なることも、透写であることの傍証となろう。

## 二 東北大本の顔貌描写

現在、『承安五節絵』模本に最も求められるのは、最初期の似絵がどのようなものであったかを知る痕跡であろう。「稀観美術資料展」の目録に「面貌描写は諸本より丁寧で優れる」と書かれた東北大本の顔貌表

現は、どこまで残っているのか《表参照》。

東北大本の目鼻や輪郭（図版7）は、面相筆のような極細の筆線で、細さも均一にゆっくりと引かれている。着実に写した個々の目鼻立ちは、同じく細線で丁寧に描かれた東博本と一致し、顔の幅も七十九例中一箇所以外は等しい。二重瞼や瞼からやや離れた眼窩の窪みの線も、薄墨を用いて匂うように描かれた太い造り眉と、一本ずつの毛の流れまで描いた細長い眉の区別もすべて一致する（図版8）（図版9）。しかし東博本（図版10）（図版12）ではしばしば顔の輪郭に目元のくびれがなく一筆になっているのに比し、東北大本は輪郭を形作るのに細線を目元でいったん窪ませ、二筆あるいは顎の出方によっては三つの曲線に分けて（図版7参照）（図版11）、膨らんだ頬やこけた頬を描き分けている。「細線重ね引き」こそ見られないものの、輪郭に重点を置いて人の顔の特徴を捉えるという似絵の形跡を見ることができよう。

東北大本の顔の輪郭は、同系統の京大本とでは七十九例中七十四例、桃園文庫本で七十八例が一致している。京大本（図版13）・桃園文庫本ではしばしば描き忘れられたり、簡略に描かれて区別ができなかった造り眉と自然の眉の描き分けも、東北大本では明確に行われていた。東博本と京大本・桃園文庫本双方の持つ顔貌描写の情報が、東北大本には共に存在していることになる。

判断が難しいのは早大本（図版14）との表情の差異である。東北大本と早大本では、顔の輪郭の広狭、眉の太細やその描き方、二重瞼か否かの部分的な情報はほとんど一致する。異なるのは早大本の輪郭が、肥瘦のある勢いの強い筆線で描かれ、戯画的な印象を与えていることにある。鎌倉初期の似絵の『隨身庭騎絵巻』（図版15）の初めの方の輪郭線と比較しても、早大本よりは、東北大本の極細の丁寧な描線の方が近い。原



15 大蔵集古館本『隨身庭騎絵巻』秦兼清



16 三の丸尚蔵館本『天子撰関大臣影』源通親

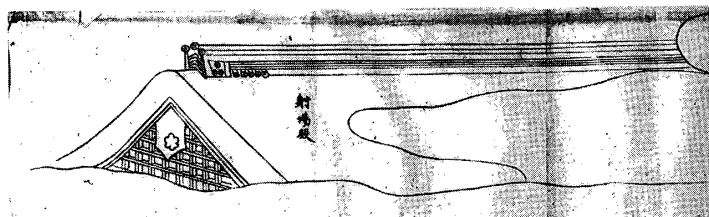


18 北村家本『公家列影図』藤原師長

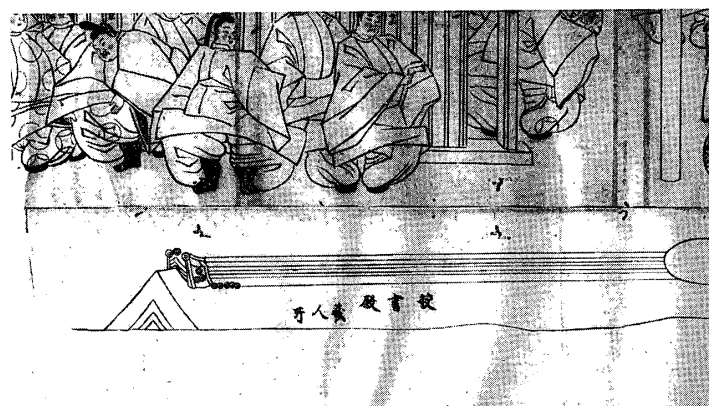
画を模写した住吉如慶の和絵も、これほど抑揚の強い線を用いたことはない。少なくとも如慶が模写した段階では、東北大本のような均一の極細の輪郭線に近い描き方であったことが想像される。

ただし早大本を完全に切り捨ててしまうわけにもゆかない。「承安五節絵」の中には、後に他の似絵にも登場する人物が十人あまり含まれている。早大本のこれらの人物の顔貌を『承安五節絵』と、『天子撰関大臣影』および『公家列影図』とを比較して見ると、描かれた時点による年齢の差はあっても、それぞれある程度の共通性があった（註9参照）。そこで『天子撰関大臣影』と『公家列影図』に、東北大本と早大本を並べて見ると、描写が丁寧である東北大本の方が、全般的に近似して見える。しかし部分的には、例えば源通親の下がった目尻（図版14参照）（図版16）や、藤原師長の上に反った眉毛の形と鷲鼻（図版17）（図版18）など、

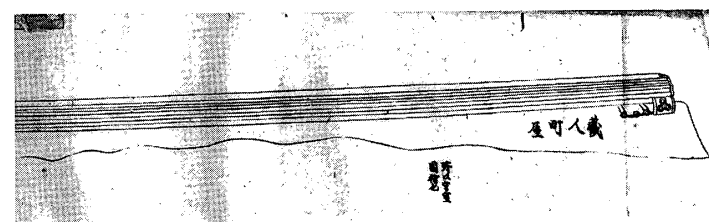




19 東北大学図書館本『承安五節絵』模本 貼紙第一紙



20 東北大学図書館本『承安五節絵』模本 貼紙第二紙



21 東北大学図書館本『承安五節絵』模本 貼紙第三紙

東北大本の、他の模本にはない特徴として、当初からと思われる、画

### 三 東北大本の貼紙について

東北大本に見られず、早大本と『天子撰関大臣影』・『公家列影図』に共通する点がある。これらの戯画的な特徴は、貴人の表現としては好ましくないものとして、東北大本ではあえて強調されなかったのではないかと(15)従って、顔貌表現を見るための基準作として東北大本を挙げるとともに、早大本の戯画的な表現も、視野の片隅に残しておくべきであろう。

面からはみ出す三枚の貼紙がある。大きさはいずれも縦十八・二センチメートル、横四十センチメートル程で、本紙と同じ薄紙に裏打ちしたものが、絵巻の下方に貼付けられ、折上げて巻き込まれていたと思われる。うち二紙は現在にははがれた状態である(16)。

一紙目〈図版19〉は、第一段第八紙の無名門と神仙門あたりの下に張られていた痕跡があり、霞と切妻の屋根が描かれ、朱で「射場殿」と書き込まれている。内裏図ではこの位置に弓場殿があるので、これを指すと考えられる。二紙目〈図版20〉は第一段十一紙の主殿司宿あたりの下方に貼られ、これも霞の中の切妻屋根に「校書殿」「蔵人所」と書かれている。これも内裏図の同位置にある校書殿を描いたものである。三紙目〈図版21〉は引続いて第十三紙あたりに挟み込まれていた。霞の上に屋根の棟のみが見え「蔵人町屋」とあり、霞の中に小さく朱で「所以宮室圖補也」と書かれている。これも校書殿の裏にあった蔵人所町屋にあたる。

卷子からはみ出す位置のこれらの貼紙は何であったのか。描かれた建物は、周囲の重要な建築の中では、内容的にはさして意味もなく、観賞性も低い。霞も屋根も役割があるとすれば、画面の区切り以外には考えられない。『承安五節絵』は、住吉如慶が模写した時点では絵巻から屏風に仕立てられていた。『考古畫譜』によれば、応仁年間に屏風とした時、土佐広周が「雲樹の足らざる処」を補ったとされる。貼紙はこの時、恐らく横に数段に貼られた絵巻の間隙を埋め、上下の場面を区切るために後から足された部分の模写だったのではないかと。朱書の、宮室図をもって「補う」という言葉が、貼紙の絵の役割の低さを裏付ける。

これらの貼紙は、屏風に仕立てられていた『承安五節絵』の状



23 東北大学図書館本『承安五節絵』  
模本第一段 季能の名前と装束の欠  
落箇所



22 東北大学図書館本『承安五節絵』模本 画中書き込み

態を窺う資料となる。また他の模本に見られないところから、東北大本と住吉如慶の原本からの模写本との近さを物語る根拠ともなる。

#### 四 画中の書き込みについて

『承安五節絵』の模本には、画中の書き込み〈図版22〉が見られる。他の高橋宗直系統にも共通するものに、場面背景となる内裏の建築物の名

称と、似絵で描かれた殿上人たちにそれぞれ付された氏名がある。住吉内記系統の特徴として、これに加えて彩色の書き込みがある。

例えば東北大本は、薄墨の輪郭のみで描かれた白描に近い状態で、彩色はほとんどなく、わずかに唇と頬に淡い朱、御簾の白緑、宴卓の朱が指される程度である。装束の模様は部分的に描かれるのみで、束帯の黒は塗られず、冠のみが墨で塗りつぶされ、他は画中に文字によって彩色が記される。濃彩を思わせる「浅キ」「良クタル」「白六文金」など色と文様の書き入れが各部分に小さく入り、如慶が彩色された屏風から模写したときの覚書であると考えられる。

東北大本の書き込みを抜き出して、『附表1』として巻末に掲げた。東北大本の書き込みはかなり細かいが、以下のような欠落がある。人物の氏名のうち、第一段の十三紙に「近江守季能朝臣」と、第二段第二十二紙の「實教廿一」の書き込みがない。季能〈図版23〉は東北大本の紙の継ぎ目に当たるので単に写し忘れたのか、或いは原本も継ぎ目に描かれていたらしく装束部分の失われた箇所が空白として残されているので、名前もかき消えていたものをそのまま空けておいたのかは判らない。實教も他本ではこの人物のみ下方に記名されているので、当初から書かれていなかった可能性もなくはない。また彩色の覚書では、第一段第十一・十二紙と、第五段第四十七・四十八紙の各人物の装束に書き込みがない。

同じ奥書を持つ京大本では、人名と建築名は書かれるものの、彩色についてはほとんど省略され、巻末の霞の「此様ナル処タミ出タル也」「装束文古而不見分/大刀地シト金ニテ出コシ/屋躰曲ナシ」「雲薄浅黄マハリヨリ白曲/又重リタルハ金ニテタミ出也」以外は書かれない。東北大本になかった季能と實教の名前が記入されているのはどう解釈すれ



24 早稲田大学図書館(乙)本『承安五節絵』模本第一段 装束の書き込み

ばよいかわからない<sup>(18)</sup>。桃園本には他の資料の引用の「一本云、」に始まる幾つかの付箋が貼られ、東博本や早大本には画中に「別巻/此の所に松の木一本あり/今此の巻松の木多し/可補也<sup>(19)</sup>」のような後人による書き込みが多く見られる。別系統の模本との照合によって、名前が補われた可能性もある。

東博本の書き込みは、東北大本とかなり近く、第一段第十一・十二紙と、第五段第四十七・四十八紙の各人物の装束も書き込みがない。建築物の名称がかなり欠落していることと、色指定が時々欠けていること、「畳」「黒」などの色指定が片かなで「タタミ」「クロ」のように書かれていることが異なる。東博本において東北大本に無いのは季能と實教の名前と、色指定が三箇所である。書き込みからすると、直接ではないものの同系統の模本ということになる。

東北大本との差異が大きいのが、早大本の書き込みである。早大本には、全体に「神楯」「黒岑」の署名を伴う後からの考察と書き込みがあるが、当初からと思しき書き込みにも、東北大本に見られた建築名称など欠けるものもありながら、東北大本にはない書き込みも多い。特に東北大本には全く見られない第一段第十一・十二紙と、第五段第四十七・四十八紙の殿上人たちの装束の彩色

が書き込まれている。ほとんど黒と朱のみの第五段はともかく、第一段の装束で、浅葱色の「薄、中、濃」を人物ごと、上着と袴ごとに細かく区別するもの(図版24)は、他の資料にも見られず、外からの補完と見ることにはできない。同じ住吉如慶模本に基づくとはいえ、奥書も異なるように、東北大本とは別の機会に模写されたものと考えられる。

#### おわりに

以上のように、新出の東北大学図書館蔵(卷子本)『承安五節絵』は、奥書の署名から、住吉内記(如慶)系統の模本の中でも京大本と桃園本系統の原本にあたる、後代の「住吉内記」による模本と考えられる。ただし奥付の中川忠順のいう七代弘貫以外にも、それ以前の五代廣行など別の内記による可能性もなくてはならない。

東北大本の最大の美点は、丁寧に描かれた顔貌表現である。それが原本に基づくものか否かを他の住吉内記系模本と比較すると、京大本・桃園本のみならず、住吉内記系模本の中でも別系統の東博本・早大本とも顔の幅、眉・髭・二重瞼などの特徴がほとんど一致し、少なくとも如慶の模本に忠実であることが確認できた。しかも京大本・桃園本のように眉の表現が省略されず、東博本のように顔の輪郭が単純化されず、早大本ほど線に抑揚が付きすぎない。なにより似絵で最も重視される顔の輪郭が、細筆で注意深く写されている。似絵として『承安五節絵』を取り上げる上で、東北大本は基準作となるであろう。ただし戲画的な早大本には、謹直な東北大本にはない個人の欠点に近いような特徴が残っている。完全に捨て去るわけにはいかない。

他にない特徴として、東北大本には、内裏の建築物と霞を描いた横長

の紙が三枚、絵巻の下方に付加されていた。屏風に仕立てられたときに、上下に貼られた絵巻を区切るために補われたものの模写と想像される。

また東北大本の画中には、濃彩の本から模写するとき書き付けたと思われる、彩色に関する書き入れが多く見られる。これは京大本・桃園本ではほとんど省略されてしまっているが、系統を異にすると思われる東博本・早大本ともかなり近く、中でも最も充実している。当初の如慶による覚書をほぼ忠実に写したものとされる。ただ東北大・東博本では、第一段第十一・十二紙と第五段第四十七・四十八紙の殿上人の装束の彩色が欠落しているが、早大本には記されている。一方、早大本も建築部分やその他の箇所にも欠落があるので、原本を想定するには、東北大本に早大本を併用するのが好ましい。

現在知られている『承安五節絵』の模本の中では顔貌表現に優れる住吉内記系の内でも、東北大本は描写、書き入れともに、最も丁寧で充実した、如慶の原模本に近い作品であり、似絵を考察する上での資料とするに足る。そして、その欠落箇所を完備させるためには、系統をやや異にする早大本が、参考となるであろう。

註

- (1) 承安二年という見解もある(註2-1②参照)。  
 (2) 承安五節絵については以下の論文がある。①福井利吉郎「代表的遺作の基礎的研究」『岩波講座 日本文学 絵巻物概説(下)』岩波書店 昭和八年②源豊宗「承安五節絵について」『人文論究』十二十四号 昭和三十七年③大和絵の研究 角川書店 昭和五十一年に再録。詞書の翻刻あり④鈴木敏三「承安五節絵詞」『初期絵巻物の風俗史的研究』吉川弘文館 昭和三十五年⑤鈴木敏三「承安五節絵考」『国学院大学大学院紀要』六号 昭和五十年⑥川島絹江「承安五節絵」詞書 本文と校異「研究と資料」二十九輯 平成五年⑦川島絹江「承安五節絵」詞書 本文と校異 補遺「研究と資料」三十輯 平成五年⑧川島絹江「承安五節絵」の流伝「東京成徳短期大学紀要」二十七号 平成六年⑨川島絹江「金刀比羅宮本『承安五節絵』につ

- いて」『研究と資料』三十一輯 平成六年⑩川島絹江新資料紹介「早稲田大学図書館蔵『承安五節之図』」『研究と資料』四十輯 平成十年⑪川島絹江「承安五節絵」の諸本―模本五種の補遺を中心に―『研究と資料』四十一輯 平成十一年  
 (3) 「貫雄曰、此絵、応仁年間屏風となす、雲樹の足らざる処、彈正広周これを補ふといふ」(『考古画譜』)など。2-1④参照。  
 (4) 「倭錦云、隆信五節淵醉図、如慶粉本末記云、承安五節巻物を屏風とす、元和六年十月吉日、禁中様に御座候を申出写申也、住吉内記」(『考古画譜』)。  
 (5) 小松茂美「似絵」の絵巻『続日本絵巻物大成』十八巻 昭和五十八年  
 (6) ①梅津次郎「鎌倉時代大和繪肖像畫の系譜」『佛教藝術』二十三号 昭和二十九年②宮次男「鎌倉時代肖像畫と似絵」『日本繪巻物全集』二十六巻 昭和五十三年  
 (7) ①宮島新一「天皇と貴族の肖像画」『肖像画』吉川弘文館 平成六年②米倉迪夫「肖像画の場」『源頼朝像』平凡社 平成七年③村重寧「似絵の意義」『日本の美術』三八七「天皇と公家の肖像」至文堂 平成十年④山本陽子「絵巻における天皇の姿の表現」『MUSEUM』五六四号 平成十二年  
 (8) 『国書刊行会叢書』の書き下し文による。  
 (9) 山本陽子「承安五節絵」の似絵性について―住吉内記系の諸模本による―『跡見学園女子大学紀要』三十五号 二〇〇二年  
 (10) 2-1⑨参照。全巻の図版も掲載されている。  
 (11) 現在、所在は判らない。図版は註2-1③に小さいながら全巻掲載されている。  
 (12) 前論文(註9)では、京大本・桃園本の奥書の署名を含む六行分すべてを、初代住吉内記如慶が記したものの写しではないかと考察した。しかし東北大本の一行目と二行目以下の差の大きさを見ると、別人の筆跡と考えざるを得ない。すなわち初代の模写部分と、別人の「住吉内記」の奥書ということになる。ここで訂正しておきたい。  
 (13) 現在のデッサンのように、細く短いあたりの線を引き重ねて、顔の輪郭を形作る似絵特有の技法とされる。  
 (14) 三の丸尚蔵館本「天子撰関御影」・北村家本「公家列影図」(『隨身庭騎繪巻・中殿御会図・公家列影図・天子撰関御影』続日本絵巻大成十八 中央公論社 昭和五十八年)  
 (15) 「男子の場合であっても、理想から外れた身軀の特徴は、罵詈雑言の材料となるような否定的価値をもつものであった」(伊藤大輔「似絵の描かれた場―いわゆる呪詛論を視野に―」『國華』二二七四號 平成十三年)  
 (16) 現在は第二紙以外はただ巻き込まれた状態であるが、はがれた痕跡が残っているの  
 (17) ちなみに「浅キ」は浅葱、「良ククル」は銀の輪郭線できくる、「白六文金」は白緑で文様が金泥、「曲」は隈取り、「シド」は紫土を指す。

(18) 桃園本でも季能の名前が欠落している。

(19) 詞書の辺りに松が描かれるのは、高橋宗直系模本の特徴である(註2-⑦参照)。

追記 東北大学図書館蔵本『承安五節絵』の紹介に関して

本論で取り上げ、一部図版を掲載した東北大学図書館蔵卷子本『承安五節絵』の存在は、二〇〇二年五月の東北大学図書館と東北大学大学院文学研究科美術史学講座による、第五回美術史学会全国大会協賛企画「東北大学附属図書館所蔵稀観美術資料展」の「Ⅱ古書画模本」への出展によって知られるようになった。

《附表1》『承安五節絵』の画中書き込み

―東北大卷子本と東博甲本の比較―

◇ ゴシック体 題記・《詞書》・文中の濃墨の氏名

書込・末記

◇ 明朝体 ラベル・印・氏名訂正・画中書込・尾

紙墨書

◇ 網掛 東博本との相違箇所

東北大学図書館蔵(一般図書)本『承安五節絵』

紙本淡彩 一卷

《表紙》(ラベル)「65-18299」

「五節淵醉圖 原本信実朝/臣筆/加度之

写」

(ラベル)「卷子299/戌A/5-6/102」

(ラベル)「棚 番 冊之内 號 孝坪蔵書」

《見返紙》(方印)「東北大学図書之印」

(方印)「斑山文庫」

《第一紙》(方印)「陽春慮記」

《詞書一》

のである。

二〇〇二年七月に図書館で全巻の閲覧をし、八月に有賀祥隆東北大学教授にうかがったところ、出展以降もまだ研究・紹介の予定はないとのこと、論文による紹介のお許しを頂いた次第である。

ここに記して、本巻の紹介と図版掲載を快諾された東北大学図書館、東北大学大学院文学研究科美術史学講座と有賀教授に感謝の意を表したい。

霜月の中のうしの日五節

のまいりなり火ともす程より

殿上人まいりつとふ蔵人頭

まいりぬれは蔵人をよひて五

節ともはまいりたりや朔平門

みせにつかはせ五節所ともたつね

につかはせなとおほすれば蔵人

みくらのことねりをよひてたつ

ねにつかはすまいりたりといへは又

滝口こなたへまはれなとおほせ

て小庭におりたちて蔵人

《第二紙》

二人にしそくさゝせて北の陣に

めくるに殿上人みなしたかひ

てめくるなり

《第三紙》

(絵)殿上人北の陣めぐり

紫宸殿戌亥角「紫宸殿西簀子」

《第四紙》

白「白」白「白」

(画中門額に)明義門

《第五紙》

紫宸殿西廊「白」

少将通資朝臣廿「浅キ」白「浅キ」

《第六紙》

持明院 侍従基宗十七「浅キ」白

崇仁門

《第七紙》

白「白」白「白」無名門「右青瓊門」

年中行事障子「白」白「スミ」スミ

《第八紙》

頭辨長方朝臣「白」草汁スミ入金ク、

ル(東博本クサノシルスミ入金ク、リ)

《第九紙》

畳「畳(東博本はタタミ「タ、ミ」の表

記)「青畳」スワウヘリ」

西園寺 頭中將實宗朝臣「白」濃浅キ」

濃浅キ」

(画中門額に)神仙門

一臈判官仲基「黒(東博本はクロ)」

蔵人範光「赤」白六ク」

新出の東北大学図書館本『承安五節絵巻』模本について

山本陽子

〈貼紙一〉

射端殿

〈第十紙〉

沓脱

〈第十一紙〉

久我 中将通親朝臣廿三

少将泰通朝臣

ウツホ柱

少将有房朝臣卅三

中将定能朝臣廿四

中将頼實朝臣

立部

左馬頭重衡朝臣十四

四条 少将隆房朝臣廿四

少将雅賢朝臣

少将顕信朝臣四十一

水無瀬 内藏人頭親信朝臣

〈貼紙二〉

校書殿 蔵人所

〈第十二紙〉

左京大夫脩範朝臣

中務権大夫經家朝臣

能登守道成朝臣

白 白

少将雅盛朝臣

蔵人次官親宗

〈第十三紙〉

〔継目で「近江守季能朝臣」の書き入れなし〕黒

主殿司宿

蔵人右衛門権佐光雅 朱スミ

蔵人右少辨兼光 朱黒文スミ 赤朱

スミクマ

本露寺 左少辨經房 朱スミ 文スミク

マ

〈第十四紙〉

侍従實明 薄浅キ白ク、ル 白 紺 白

ク、ル

侍従成家十七 濃浅キ白ク、ル 白 中

浅キ

兵衛佐經正 ウア 白ク、ル

山科 右衛門佐實教 薄浅キ白ク、ル

侍従伊輔十七

民部権少将宗雅 中浅キ白ク、ル 白

紺長ク、ル

源中納言大夫兼忠十三

侍従公衡 濃浅キ白ク、ル

土佐守資頼廿五 薄浅キ白ク、ル

白 紺

源中納言資時十三 中浅キ白ク、ル

白 薄エンシ長ク、ル

高遣戸

スミ 白 紺

後涼殿南廂

〈貼紙三〉

蔵人町屋 所以宮室圖補也

〈第十六紙〉

《詞書二》

北の陣にめくるみち後涼殿の

西うらをとおりて弘徽殿のほそ

とのゝまへ登花殿のまへをとおりて

玄暉門のうち貞観殿のつまとの

みきりに蔵入の頭はたちぬれば

殿上人朔平門にゆきむかひてをのく

まいりする五節のしたしき人或は

かたらひたる人をこなひて殿上人

ともつきてえんたうより玄暉門

のうちにいりて宣曜殿のまへより

五節所常寧殿にのほるなり五

節所のやうにしたかひて西より登

〈第十七紙〉

花殿のまへよりまいるこの五節は

承安元年の事なり

〈第十八紙〉

〔絵―五節姫ら朔平門を経て玄暉門のうちに入りゆ

く〕

〈第十九紙〉

白

季能朝臣 白六ク

朔平門

經家朝臣廿六 白六ク

白 朱

大炊御門 頼實朝臣十七 白 濃浅キ

白ク、ル

泰通朝臣廿五 薄浅キ 中浅キ

〈第二十紙〉

隆房朝臣廿四 薄浅キ 薄浅キ

雅賢朝臣薄浅キ 白 薄 (消す) 濃浅

キ

〈第二十一紙〉 (東博本には緑青)

〈第二十二紙〉

(五節姫) 六文スミ カサ子朱 良 白  
文良 白文良 白 良 良 良 白

良「良」白「白」良

實明廿一「中浅キ良ク、ル」白「紺」中  
浅キ良ク、ル

〔實教廿一の名前書き込み無し〕中浅キ良ク、ル  
白「濃浅キ」

親宗廿八「黒」中浅キ良ク、ル

經房「黒」白

木工頭親雅「黒」

侍従公時十五「中浅キ良ク、ル」白「薄  
エンシ紺ク、ル」

〈第二十三紙〉

〔下人〕黒「白」

〈第二十四紙〉

〔五節姫〕六文スミ「白」良「白」白文  
良「白」白「白」良「白」良「白」

白「良」良「白」

維盛十三「薄浅キ良ク、ル」白「薄エン  
シ紺ク、ル」

〔下人〕黒「白」

〈第二十五紙〉

〔下人〕黒「黄土ク」

〈第二十五紙〉

〔五節姫〕松六「良」白「六」カサ子白

袴白文良「黒」良文「黒」良文「黒」良  
文「黒」良文「黒」良文

公衡十四「浅キ」白「薄紫」

〔下人〕黒「黄土ク」

〈第二十六紙〉

白

〈第二十七紙〉

ヒハタ「ワト」白「瓦アイロウ」薄スミ

クマ「黄土」白「白」

〈第二十八紙〉

〔五節姫〕白文良「白文良」コン「文丸  
ハ金カラ草良」黒「黒」蒙白浪良松六木  
シト

白

基宗十七「薄浅キ無文」白「薄紫」無  
文「コキ浅キノクニテク、ル」

紙地「緑青」

〈第二十九紙〉

白タミ出

實宗朝臣廿七「浅キ」白「浅キ直衣ヨリ  
コキ」

長方朝臣卅三

〈第三十紙〉〔東博本の朝浅キ〕白「浅キ」無し  
《詞書三》

五節ともまよりはてぬれば  
帳台に行幸なる殿上人  
をのく脂燭をさしてさき  
にまいる御ともに関白をはし  
めてしかるへき公卿まいる承  
香殿をとをりて后町の廊  
より常寧殿になりをはり  
ぬ

〈第三十一紙〉

〔絵〕主上常寧殿へ渡御

承香殿

前左衛門佐平忠度朝臣「黒カキワラヒ」  
薄浅キ

〈第三十二紙〉

水無瀬親信「無文薄浅キ」白「薄浅キ」

〈第三十三紙〉  
緑青

〔第三十四紙〕  
〔天皇〕御衣白文良／御袴薄紅梅文良

〈第三十五紙〉

呉竹臺「紙地上黄土ク引」竹緑葉如此黒  
書緑入／白六ノ葉交〔東博本は入〕

松殿基房「薄浅キ」白「白」六「薄浅キ  
文良」六

假橋

〈第三十六紙〉

新長橋／帳臺試之日假造

〔東博本は大炊御門・九條殿・久我上方  
に朱で書込〕

大炊御門左大臣「浅キ」白「白」白  
六「六」浅キ

東西北階「白」

清涼殿

二間

〈第三十七紙〉

右大臣九條殿兼實「浅キ少コク」白「浅  
キ」

東面簀子

孫廂

久我内大臣「浅キ」白「萌黄文金」

左大將師長「浅キ〔東博本浅黄〕」白  
浅キ〔東博本浅黄〕文金

〈第三十八紙〉

額間

〈第三十九紙〉

《詞書四》

新出の東北大学図書館本『承安五節絵巻』模本について

山本陽子

そのうち帳台に舞

ひめともまいりぬるほどに

殿上人后町の廊にて

みたれ舞なりひんさゝ

らまんさいらくなといとかし

かましちやうたいのこゝろみ

はてぬれば主上かへらせ

たまふ行幸のみち

さきにおなし

〈第四十紙〉

(絵)后町廊における殿上人の乱れ舞

常寧殿

通親朝臣「浅キ」浅キ

定能朝臣「白」浅キ

泰通朝臣「白」浅キ 浅キ

有房朝臣「浅キ」白

顕信朝臣「浅キ」白 浅キ

后町廊

隆房朝臣「浅キ」白

雅賢「浅キ」白

基宗「浅キ」白

實明「浅キ」白 浅キ

〈第四十二紙〉

公衡「浅キ」白

(殿上人) 浅キ「白」浅キ

〈第四十三紙〉

《詞書五》

とらの日は殿上の「此所破失」(淵)

酔なりなをしにいた」(し)

あこめむまの時より殿

上人まいりつとひて淵

酔はしまる

〈第四十四紙〉

(絵)清涼殿殿上の間における殿上人の酒宴

〈第四十五紙〉

上戸

新藏人成實「良」

範光「黒」

小板敷

殿上「タタミ」(東博本は畳)

白「丹スミウスク」クサシル

仲基「六」

惟頼「黒」(東博本に朱)

神仙門南柱

朱

〈第四十六紙〉

(門額に) 神仙門

棹間

〈第四十七紙〉

沓脱

〈第四十八紙〉

火櫃

小壁「白」

女官階

下戸

女官戸

主殿司宿「白」

〈第四十九紙〉

《詞書六》

淵酔はてぬればかた

ぬきてわたとのまてをのく

くつをはきて後涼殿のひん

かしよりあさかれみの御前より

御湯とのゝはさまをいて、

弘徽殿のほそとのまへ登

花殿をめくって宣耀殿の

そり橋のしよりのほりて

常寧殿五節所のひむかし

の壇のうへをめくる

なり

〈第五十紙〉

(絵)淵酔後殿上人ら登花殿の前を行く

(官女達) シト「(東博本に朱)キ」六

(衛府官) 紺金ク、ル「朱」白「紺」

(衛府官) 六ト紺ト「(東博本に朱)同」

紺

(衛府官) シトク「シトク」

〈第五十一紙〉

(殿上人) 中浅キ白ク、ル「白」(東博本

に朱)紺端ヨリ金ク、ル

(官女達) 白「白」

〈第五十二紙〉

弘徽殿

〈第五十三紙〉

(殿上人) 白六ク長ク、ル

(衛府官) 六「六」

(衛府官) 同

(衛府官) 同

(衛府官) 同

(殿上人) 薄浅キ「白」薄浅キ白ク、ル

〈第五十四紙〉

(衛府官) 同「白」



新出の東北大学図書館本『承安五節絵巻』模本について

山本陽子

(衛府官) 同

(殿上人) 薄浅キ「白」白六長ク、ル

(衛府官) 濃肉色朱ク、ル「白」同

(衛府官) 同

(衛府官) 同

(衛府官) 同

〈第五十五紙〉

(衛府官) 紺「白」同

(衛府官) 同

(衛府官) 同

(衛府官) 同

(殿上人) 浅キ白ク、ル「白」紺端ヨリ

長曲

(走童女) 白「白」中浅キ「六」文ス

「ミ」白

(走童女) 薄シト端ヨリ金クマ「カサ子

六」朱文キ「白」

(走童女) 白「シト」

長泥

〈第五十六紙〉

(衛府官) 六「六」

(衛府官) 同

(殿上人) 浅キ白ク、ル「カサ子紫白」

濃浅キ良白ク、ル

登華殿

(衛府官) 同「黄土ニ黒入良ク、ル」(東

博本ではウトニスミ入コンククル)

(衛府官) 同

〈第五十七紙〉

(殿上人) 浅キ白ク、ル「白」浅キ良

ク、ル

〈第五十八紙〉

《詞書七》

かたぬきはてぬれば御前のこゝろみなり

ところくゝの淵酔推参などにまいりて

束帯にてかへりまいりて舞ひめわらは

などのほせつれば御前の御装束なをし

て殿上人を清涼殿の御前にめす又

さまく舞のゝしるなり

〈第五十九紙〉

(絵)清涼殿御前のこゝろみ殿上人の舞

ミス白緑竹緑ニテ引ノ千鳥カケ黄土ク

(殿上人) 黒「白無文」白「白」白「白」

黄土ク

(風流の櫛) エンシ

〈第六十紙〉

(殿上人) 黒

(殿上人) 黒「白」白

(殿上人) 黒カキワラヒ「六」

(殿上人) 黒「白」

(殿上人) 黒

板 (殿上人) 黒「白」

板 (殿上人) 黒カキワラヒ「六」

白文

長 (殿上人) 黒

(殿上人) 黒

(殿上人) 黒「装束文古而不見」

〈第六十一紙〉

《詞書八》

卯日かたぬきけふはきぬをいたさす昨日の

みちのまゝにめぐりはてぬればわらは御覧なり

清涼殿のまこひさしに関白已下大臣両三着

座そのゝちわらはをめすすゑくゝの殿上人承香

殿のいぬるのすみのほとりよりうけとりて

かり橋より御前にまいるなり下仕承香

殿のすみのすのこ橋よりおりてまいる

蔵人これにつく殿上人のつく事も

あり

〈第六十二紙〉

(絵)わらは御覧

(殿上人) 浅キ「白」白六文金

(五節姫) 松六木シト「白」地白文良

六「文金」ウスカウ「薄紅梅」

〈第六十三紙〉

(殿上人) 浅キ「白」浅キ「白」

(殿上人) 面古而不見「浅キ」白「浅キ」

(殿上人) 浅キ「六」六

〈第六十四紙〉

紫土(東博本シト)

瓦アイロウ薄墨曲「スミ」(東博本クロ)

白

〈第六十五紙〉

《詞書九》

辰日けふは節会なり火ともして

のちかんだちめ殿上人束帯にてま

いる巡方の帯魚袋をつくことはし

まりて舞姫わらはなどのほりはて、

殿上人れいの露台にて

みたれまふあこゑひんさゝらまんさいらく

舞はてつまとのもとによりて蔵人の

頭をはやすとよりすこしいて、まふ節会

はて、舞姫わらはおろしつれば清涼殿の

御前に殿上人をめす昨日の夜におなし

〈第六十六紙〉

(絵)紫宸殿の露台における殿上人)

(貼紙)高?臺一キ

〈第六十七紙〉

参議左大辨實徳卿」冠ノカケラムラサ

キ」此糸ムラサキ」地白」文ノ梅クロロキ

ハスミウスキハ/アイロウ鳥モアイロウ

/シタノスチモアイロウ」カハ」文不

見」

格子」

参議頼定卿」黒(東博本クロ)」コシノ

サカリタル物/横ノスシ筋金」(東博本

横筋金)白/良クマ/何モ如此」

中納言忠親卿」クロキニカキタルト同」

(東博本のクロニテハ相違イロ付クマ?)

〈第六十八紙〉

参議中将實」家卿 下字古而不見」黒

(東博本クロ)」太刀帯取紺横筋金」茶

色」

中納言」雅頼卿」黒(東博本クロ)」カ

ウシ」

中納言成親卿/別當」黒(東博本ク

ロ)」

〈第六十九紙〉

花山院 中納言兼雅卿」黒(東博本ク

ロ)」

轉法輪 大納言實房卿」黒(東博本ク

ロ)」

庭?田 中納言資賢卿」黒(東博本ク

〈第七十紙〉

左大将師長卿」黒(東博本クロ)」

白」

ニシキ」

先同」

皿紙色」

此様ナル処タミ出タル也」

雲薄浅黄マハリヨリ白曲/又重タルハ金

ニテタミ出也」(東博本クモウスアサキ

マハリヨリ白ク、ル又カサナリタルハ金

タミ出也」

装束文古而不見分/太刀地シト金ニテ出

ヲコシ/屋臺曲ナシ」

〈第七十一紙〉

右屏風一双分也。他見無用(東博本

「也」以下すべて無し)」

禁裏御道具」

五節淵醉之御屏風」

右京大夫信實朝臣筆」

右繪本者如慶法眼字也」

〈第七十二紙〉

住吉内記」

〈第七十三紙〉

此の繪卷は住吉内記弘貫が寫せるもので

原本のなき今日/貴重な寫しと云ふ」

中川忠順氏」

高野辰之博士旧藏本」

《附表2》 東北大学図書館本『承安五節絵』模本の紙継ぎ  
縦 37.4 cm

紙	寸法	備考	紙	寸法	備考	紙	寸法	備考
見返紙	42.5 cm		第25紙	21.5 cm		第50紙	27.0 cm	
第1紙	27.9 cm	一段詞	第26紙	5.0 cm		第51紙	8.5 cm	
第2紙	9.5 cm		第27紙	25.5 cm		第52紙	4.5 cm	
第3紙	4.5 cm		第28紙	24.5 cm		第53紙	27.0 cm	
第4紙	25.0 cm		第29紙	23.5 cm		第54紙	24.5 cm	
第5紙	14.0 cm		第30紙	26.5 cm	三段詞	第55紙	23.0 cm	
第6紙	26.5 cm		第31紙	16.0 cm		第56紙	21.0 cm	
第7紙	21.0 cm		第32紙	16.0 cm		第57紙	9.5 cm	
第8紙	9.5 cm		第33紙	10.0 cm		第58紙	16.5 cm	七段詞
第9紙	26.5 cm		第34紙	27.5 cm		第59紙	21.0 cm	
第10紙	2.0 cm		第35紙	26.5 cm		第60紙	26.5 cm	
第11紙	23.5 cm		第36紙	25.0 cm		第61紙	19.5 cm	八段詞
第12紙	17.5 cm	↑	第37紙	27.5 cm		第62紙	27.5 cm	
第13紙	7.5 cm	貼紙	第38紙	12.5 cm		第63紙	27.5 cm	
第14紙	26.5 cm	↓	第39紙	26.5 cm	四段詞	第64紙	17.5 cm	
第15紙	23.0 cm		第40紙	22.0 cm		第65紙	27.5 cm	九段詞
第16紙	27.5 cm	二段詞	第41紙	27.5 cm		第66紙	26.5 cm	小貼紙
第17紙	6.0 cm		第42紙	8.0 cm		第67紙	27.2 cm	
第18紙	17.3 cm		第43紙	19.0 cm	五段詞	第68紙	12.0 cm	
第19紙	27.5 cm		第44紙	3.5 cm		第69紙	15.3 cm	
第20紙	13.0 cm		第45紙	27.5 cm		第70紙	22.5 cm	
第21紙	7.0 cm		第46紙	6.5 cm		第71紙	17.0 cm	奥書
第22紙	26.5 cm		第47紙	20.5 cm		第72紙	5.2 cm	
第23紙	5.5 cm		第48紙	26.2 cm		奥付紙	18.5 cm	奥付
第24紙	27.5 cm		第49紙	27.5 cm	六段詞			